

学位論文題目 日本語学習者の統語的複合動詞の意味推測における文脈量、日本語習熟度、後項動詞の種類の影響

氏名 谷内 美智子

第二言語習得における語彙学習は、四技能の活動の中で意味を推測するという形で進められることが多い。しかし日本語の複合動詞のように、上級になっても十分な知識を身につけることが困難な語が存在する。本研究ではモンゴル語を母語とする学習者を対象に、意味推測時の文脈量、日本語習熟度、後項動詞の種類の三つの要因が統語的複合動詞の意味推測にどのような影響を与えるかを検討した。

本研究では調査を二回行った。採用した解答形式は一回目が多枝選択式、二回目は記述式である。調査対象にしたのは統語的複合動詞で、後項動詞の特徴によって三種類（統語 1：日本語能力試験の 3 級か 4 級の動詞で、複合動詞としての意味が単独動詞の時の第一義 統語 2：日本語能力試験の 3 級か 4 級の動詞で、複合動詞としての意味が単独動詞の時の派生義 統語 3：日本語能力試験の 1 級か級外の動詞）に分けた。そして、多枝選択式、記述式のそれぞれで、文脈量、日本語習熟度、後項動詞の種類の三点から意味推測の正確さと意味推測の特徴を比較した。

本研究は 4 つの研究から構成される。研究 1 では多枝選択式における意味推測の正確さを検討した。その結果、単文程度の文脈量で正確に意味が推測できるようになること、正確な意味推測にはある程度の日本語能力が必要であること、統語 1の方が統語 2よりも正確に意味を推測できることが明らかとなった。

研究 2 では多枝選択式における意味推測の特徴を検討した。調査対象語ごとに選択者数が最も多い選択枝（最多選択枝）が文脈量、日本語習熟度によって変わるか否か、そして後項動詞の種類によって最多選択枝に違いがあるか否かを整理した。その結果、統語 1よりも統語 2の方が文脈量や日本語習熟度で最多選択枝が異なる語が多いことが明らかとなった。しかし統語 2の方が推測される意味が異なる傾向にあるとはいっても、文脈量や日本語習熟度ごとに最多選択枝がすべて異なるということではなかった。

研究 3 では記述式における意味推測の正確さを検討した。その結果、正確に意味を推測するには複文程度の文脈量が必要であること、正確な意味推測にはある程度の日本語能力が必要であること、統語 1が最も正確に意味を推測でき、その次に統語 2、最も正確に意味を推測するのが困難だったのは統語 3であることが明らかとなった。

研究 4 では記述式における意味推測の特徴を検討した。調査対象語ごとに調査対象者が記述した意味を分類し、記述された意味の傾向が文脈の有無、文脈量、日本語習熟度によって異なるかを後項動詞の種類ごとに検討した。その結果、次の点が明らかとなった。統語 1と統語 2では、文脈の有無、文脈量、日本語習熟度では推測される意味が同じ語の方が多いが、統語 1と統語 2では推測される意味の種類が異なっていた。統語 3では文脈の有無では推測される意味が異なる語が多いものの、文脈量、日本語習熟度では推測される意味が異なる語は少なかった。また、統語 1、統語 2、統語 3で差はあるが、文脈

からの情報が利用できない時には意味推測自体が不可能であっても、文脈からの情報が利用できる時には何かしらの意味を推測できるようになるケースが、統語 1、統語 2、統語 3 の全てで観察された。さらに、正確に意味を推測することが困難な場合、前項動詞か後項動詞の意味で調査対象語を理解している傾向が見られた。

本研究の知見として次の点が挙げられる。一点目は意味を正確に推測できなかったとしても、それが必ずしも意味推測自体ができなかったことを意味するものではないという点である。たとえ意味を正確に推測できなかったとしても、条件がそろえば何かしらの意味を推測していると言える。

二点目は文脈からの情報は語の意味推測には不可欠であるものの、文脈からの情報が多いからといって必ずしも正確な意味の推測につながるとは限らないという点である。そのため、意味推測を正確にする文脈からの情報の質について、今後は検討を重ねる必要があると言える。

三点目は日本語習熟度が高くても推測される意味の傾向が大きく異なるとは限らないという点である。このことから、意味推測時に利用される文脈からの情報は、日本語習熟度による違いはないと考えられる。

四点目は統語的複合動詞の意味推測では、前項動詞と後項動詞のもととなっている単独動詞の知識をどの程度持っているかによって、正確に意味を推測できるかが影響されるという点である。このことから、複合動詞の学習では単独動詞との違いをより明確にし、前項動詞と後項動詞の意味からどのような意味となるのかを明示的に指導することが有効だと考えられる。

これらの点は我々が持つ直感に合致するものである。しかし、これらの点を実証的に明らかにしたことは本研究の大きな意義であり、複合動詞の習得研究においても語の意味推測研究においても有用な知見を提供できたと考えられる。